

# パブリック・インボルブメントで用いられる広報資料における 情報の種類や密度と配置に関する研究\*

## Contents, Density and Layout of Information on the Newsletter Distributed in the Public Involvement Process\*

寺部慎太郎\*\*・増田匠朗\*\*\*・内山久雄\*\*\*\*

By Shintaro TERABE\*\*・Takuro MASUDA\*\*\*・Hisao UCHIYAMA\*\*\*\*

### 1. はじめに

公共事業において、パブリック・インボルブメント（以下、PI）が計画策定プロセスのなかに体系的に位置付けられ、ガイドライン等が策定・公表されるなど、PIを実際に導入していくための環境は、概ね整備されたと考えられる<sup>1)</sup>。

その一方で、PIを導入したにも関わらず、市民等の関心が喚起されない、事業の目的や内容について十分に認知や理解が進まないなど、想定していたような効果が発揮されていない事例が多いのが現状である。PIを行ううえで、計画の初期段階における情報伝達活動は、社会基盤整備計画に市民の意識を向けるために重要な手法の一つであり<sup>2)</sup>、中でも市民が最初に計画についての情報に接するであろうニュースレターや、新聞の折込チラシなどの広報資料は最も重要な情報伝達手法ではないかと考えられる<sup>3)</sup>。さらに、今後は高齢化社会の進行により、年配者、高齢者のPIへの参加が一層増加すると予想され、分かりやすく、読みやすい広報資料について検討していくことは、より重要になってくると考えられる。

そこで本研究では、まず既存の広報資料の傾向を分析し、現状のものよりも市民の社会基盤整備に対する意識向上を促す資料とはどのようなものであるか、実験を通して検証し、計画の初期段階で用いられる効果的な広報資料について提案したい。

### 2. 既存資料の分析

まず既存資料の傾向を分析するために、国土交通省ホームページ内の「市民参画の道づくり 全国の事例リンク集」<sup>4)</sup>より、10事例についての創刊号のニュースレター（以下、資料）を収集した。次に各資料の情報の種類を『題名』、『計画内容』、『PIプロセス』、『有識者委員会』、『道路の必要性』、『整備効果』、『連絡先』

先』の7つの項目に分類し、面積比を求めた。その結果、図-1に示すように、PIで用いられる創刊号の資料は道路の必要性を強調した『目的強調型』、有識者委員会の情報の割合が大きい『体制強調型』、各項目についてバランス良く掲載されている『バランス型』の3種類に分類できることが分かった。

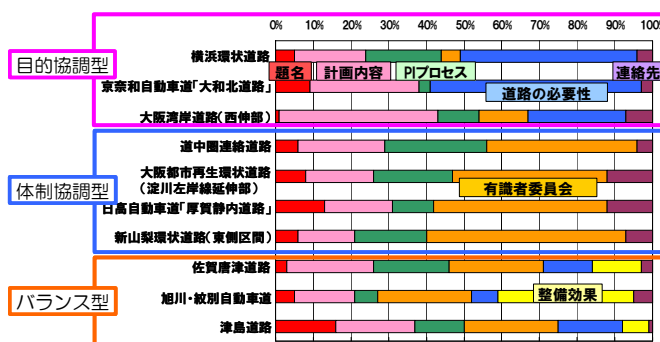


図-1 既存ニュースレター内の情報量（面積比）

### 3. 実験概要

収集した資料の中から「京奈和自動車道 大和北道路」を事業モデルにして、前者の3種類について、仮想的な道路計画に関する資料を作成した。作成資料は新聞の折込チラシで大きさがA3で、片面カラー刷りの創刊号のニュースレターと想定した。

次にアイカメラ（株式会社ナックイメージテクノロジーのEMR-8Bを使用）を装着した被験者に作成資料を読んでもらう実験を行う。実験の手順であるが、まず被験者には、意識調査票に記入をしてもらう。この意識調査票では社会基盤整備に対する意識、生活形態に関する設問を設けてある。次に実験の内容をMicrosoft PowerPointを用いて被験者に説明した。このとき、①被験者には計画対象地域の住民になりきって資料を読んでもらうこと、②資料を読む際には、被験者自身が実際に家でくつろいで新聞などに目を通す感覚で読んで欲しいこと、の2点を強調して説明を行った。そして説明後にアイカメラを装着してもらい、1人の被験者に対して1種類の資料を読んでもらった。資料観覧後、事後調査票に記入してもらい実験は終了となる。この事後調査票には計画に対する興味度・理解度、作成資料の読みやすさに関する

\*キーワード：市民参加，計画手法論，行政広告

\*\*正会員，博(工)，東京理科大学理工学部土木工学科  
(千葉県野田市山崎 2641，

TEL04-7122-1623, FAX04-7123-9766)

\*\*\*非会員，学(工)，元東京理科大学理工学部土木工学科

\*\*\*\*正会員，工博，東京理科大学理工学部土木工学科

設問と、意識調査票と同じ内容の社会基盤整備に対する意識についての設問を設けてある。興味度・理解度は「計画内容」、「PIプロセス」、「有識者委員会」、「道路の必要性」、「整備効果」、「計画の進め方」、「計画への住民の関わり方」の7つの項目について、作成資料の読みやすさは「読みやすさ」、「色の使い方」、「文字の量」、「文字の大きさ」、「図表の量」、「写真の量」の7つの項目について、5段階で評価してもらい、評価した理由について記述してもらうようにした。

実験は本学の学部3年生（18名）を対象とし、2008年12月8日（月）-10日（水）に実施された。



図-2 実験の様子

#### 4. 実験結果とその考察

##### (1) 注視パターンとの分析とその考察

アイカメラより得られた視線データをもとに、株式会社ナックイメージテクノロジーの解析ソフトEMR-dFactoryを用いて注視分析を行った。この注視分析で得られる注視項目視線変化表より、資料の情報量と注視項目は相関があること（図-3）、ほとんどの被験者（16人中

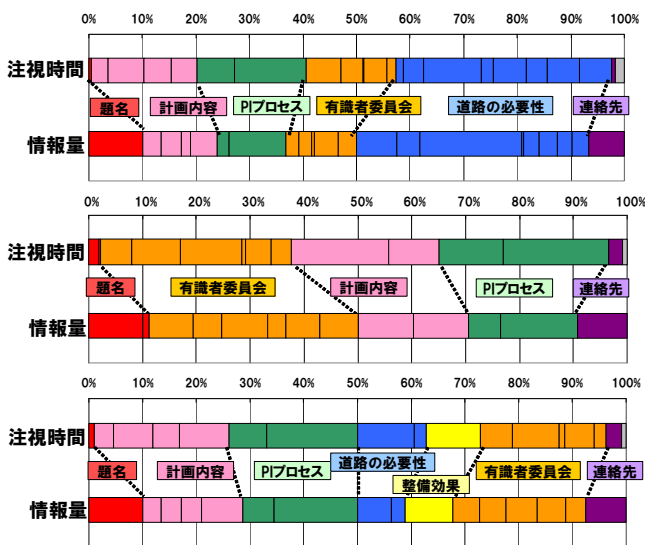


図-3 注視時間と情報量の関係

（上から「目的強調型」相関係数0.80、「体制強調型」相関係数0.76、「バランス型」相関係数0.80）

13人）が丁寧に資料を読み進めていく注視パターンであることの2点が分かった。この結果から、今回の実験において被験者は丁寧に資料を読み込む傾向であることが示唆できる。これは「Zの法則」（人間は多くの情報を目にした時、視線は自然と左上に行く。そこからZの文字を描くように視線が移動する）とは異なった読み方であり、アイカメラの装着や実験環境が起因していると考えられる。

##### (2) 意識調査の分析とその考察

意識調査票と事後調査票より、資料観覧前後での社会基盤整備に対する意識変化について分析を行った。その結果、『目的強調型』は道路整備やPIの項目の評価が高くなり、それ以外に対する評価が低い傾向が見られた。『体制強調型』はPIに関しては高評価であった。『バランス型』は全体的に評価が低くなった。

また事後調査票より、計画に対する興味度・理解度、作成資料の読みやすさについて分析を行った。

まず、興味度と理解度であるが、全資料に共通して「有識者委員会」の項目が共に低い評価となった。また「PIプロセス」、「計画の進め方」などのPIに関する興味度・理解度の相関係数がそれぞれ0.09、0.26と低い値となり、相関性が低い傾向が見られた。資料ごとでは『目的強調型』は「計画内容」「道路の必要性」の項目が他の資料よりも興味度・理解度共に高い傾向が見られた。『体制強調型』は他の資料に比べ、「計画内容」「道路の必要性」、「整備効果」の項目が低い評価となったが、「有識者委員会」「計画の進め方」「計画への住民の関わり方」などに関する項目は、他の資料よりも理解度の評価の高いサンプルが多い傾向が見られた（図-4）。作成資料の読みやすさについては、文字が小さいと評価した被験者が全体の約半数の割合を占め、理由では「PIプロセスのフロー図内の字が小さくて読みにくい」という意見が多く見られた。また、『体制強調型』

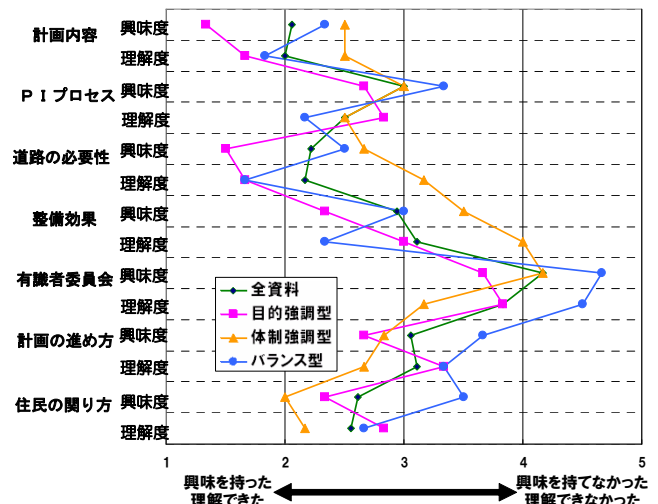


図-4 事後調査における興味度と理解度の関係

は被験者の約7割が写真の量、図表の量が少ないと評価していた（図-5）。

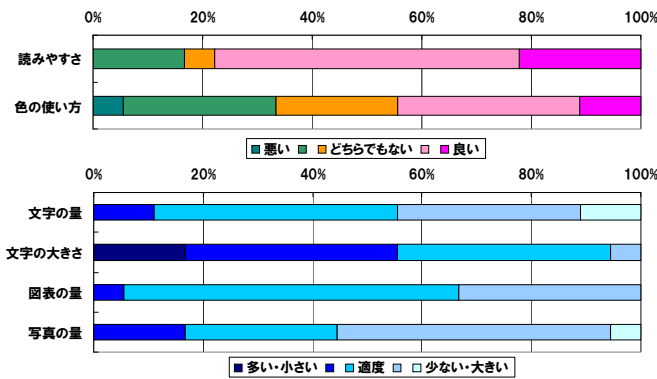


図-5 事後調査における読みやすさの評価

## 5. おわりに

本研究は、新聞折込等で配布されるニュースレターなどの広報資料について、そこに含まれる情報の種類や密度と配置をできるだけ効果的なものとするを目的とした。まず道路計画を対象に既存事例についての創刊号のニュースレターを収集した。それらに含まれる情報の種類を7項目に分類し、面積比を求めることで、資料全体を3つに類型化できた。それを元に仮想的な道路計画に関する資料を作成し、アイカメラを装着した被験者に作成資料を読んでもらう実験を行った。この実験で計測された視線データから、資料の情報量と注視項目は相関性があることが分かった。また実験前後の意識調査より、計画の初期段階での資料としては「体制強調型」に比べて「目的強調型」が、計画の興味や理解を得やすく有効だという知見を得ることができた。

さて、まず既存資料の問題点について考察する。計画の初期段階の資料としては『目的強調型』のように、図表や写真を多用し、市民に道路の必要性を訴えかけるものが、計画の興味、理解を促進しやすいという面で有効だと考えられる。一方『体制強調型』は計画の初期段階ではあまり有効ではないと考えられるが、実験結果よりPIへの理解は高まる傾向が見られた。従って、『体制強調型』はPIへの理解を深めるために、ある程度計画が進んだ段階で市民へ発信するには有効な資料だと考えられる。

また、実験の結果より、現状の広報資料は市民に資料を読んでもらえれば、PIの理解、計画への関心が促進されることが示唆できたことから、今後は市民に読んでもらうための工夫が重要であると言える。

最後に、本研究の成果から、計画の初期段階で用いられる効果的な広報資料について提案する。①一般的に

新聞の折込チラシは1秒間に1枚程度しか読まれないといわれていること、②チラシの読み方はZの法則に従うものであるといわれていること、の2点を考慮すると、市民の興味を引くためにも、①資料の左上には計画道路などの題名よりも、道路の必要性を訴えかけるフレーズを配置すること、②内容は「道路の必要性」に関する項目を主とすること、③「PIプロセス」などは、専門用語や文章による説明を極力省き、イラストなどを用いて一般市民にも分かり易く説明すること、の3点が重要だと言える。

なお本研究の遂行にあたり、株式会社ナックイメージテクノロジーより実験機材の貸与を受け、視線計測や分析時に多大なるご支援を頂いた。ここに記し謝意を表す。

## 参考文献

- 1) 屋井鉄雄・前川秀和：「市民参画の道づくり パブリック・インボルブメント (PI) ハンドブック」, ぎょうせい, 2004.
- 2) 屋井鉄雄・寺部慎太郎・関健太郎：「広域交通計画におけるパブリック・インボルブメントの方法に関する研究」, 土木学会論文集, No. 653, IV-48, pp. 105-115, 2000.
- 3) 寺部慎太郎：「パブリックインボルブメントの新しい視点」運輸と経済, Vol. 64, No. 1, pp. 22-26, 2004.
- 4) 国土交通省道路局：「市民参画型道づくり」 <https://www.mlit.go.jp/road/pi/index.html>, 2008年11月情報取得.
- 5) 大野健彦：「視線から何がわかるか-視線測定に基づく高次認知処理の解明」, 認知科学, 9(4), pp. 565-579, 2002.